

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。

師走になりました。寒い日が続きますね。受験生のみなさんはセンター試験の対策に追われる毎日をご過ごしていることと思います。あと1ヶ月余り。悔いなく最高の結果を残したいですね。

さて、みなさん、1週間ほど時間がありました。どのような解答が仕上がったでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第4問は近現代からの出題で「都市化とマスメディアの発展による社会の変化」について考えさせる問題でした。

さほど資料文が与えられていない問題であったので、普段の学習で培った知識をいかに効率よく引き出して、解答に反映できるかが問われる問題でありました。

それでは早速解説を始めていきましょう。

<都市化とマス＝メディアの発展による

社会の変化>

設問

A 上のような社会の変化は、政治のしくみをどのように変えていったか。大正時代の終わりまでについて、3行以内で説明しなさい。

設問Aのテーマは「上のような社会の変化は、政治のしくみをどのように変えていったか」。条件として「大正時代の終わりまでについて」とあります。

まずは「上のような社会の変化」の内容についてみていきましょう。

(問題文)

第一次世界大戦中から、日本では都市化とマス＝メディアの発展が顕著になり、海外からの情報と思想の流入も、大量で急速になった。

問題文では、第一次世界大戦中から、日本では

- (1) 都市化
- (2) マス＝メディアの発展

が顕著になったことが指摘され、また「海外からの情報と思想の流入も、大量で急速になった」とあります。では、それぞれの内容をもう少し詳しく考えてみましょう。

(1) 都市化

①都市の人口が増加・・・労働者のみならず、会社員などの事務系のホワイトカラーのサラリーマンも増加した。特に**都市生活者は中等・高等教育の拡充と産業・経済の発展により形成された「都市中間層（新中間層）」**と呼ばれた。

②都市の拡大・・・人口の増加に伴い市街地が郊外へと広がった。また、都心の官庁や会社へ通勤するサラリーマンを中心とする中産階級の住宅として文化住宅（ガラス戸・赤瓦の屋根のある洋風の応接間を

強者の戦略

持った日本式の住宅)が建設された。

③都市景観・生活様式の変化・・・東京の丸ビルに代表される鉄筋コンクリート造の建築物が増加した。また、洋装や洋食(カレーライス(ライスカレー)など)が社会的に広がりを見せた。

(2)マス＝メディアの発達

①新聞・雑誌・・・『大阪朝日新聞』をはじめ**新聞の発行部数が増加**した。また、『中央公論』などの総合雑誌、『キング』などの大衆(娯楽)雑誌も発行された。

②ラジオ放送・・・東京・大阪・名古屋の各放送局を統合して、1926年には日本放送協会(NHK)が設立された。

③映画・・・映画制作会社として1912年に日活が創立され、1920年には松竹も映画制作に乗り出した。昭和初期までは無声映画であった。

さて、では以上のような状況が「政治のしくみをどのように変えていった」のでしょうか。

まず、第一次世界大戦中から大正時代の終わりという時代設定から「大正デモクラシー」を想起した人も多いと思います。

「大正デモクラシー」の具体的内容としては市民的自由(言論・出版・集会)の拡大、大衆の政治参加(政党政治・普通選挙)要求があげられます。そのような風潮が広まっていった背景には、**都市における人口の増加と「都市中間層(新中間層)」の拡大、新聞・雑誌などのメディアによって大衆の政治意識が高揚したこと**、がありました。また、第一次世界大戦を契機として世界的に民主主義のあり方が問われる一方で、ロシア革命によるソヴィエトの成立といった社会主義運動拡大の風潮も、その背景としてあげることができます。これについては問題文にも「海外からの情報と思想の流入」という表現で説明されていますね。

さて、ここまでくればこの設問Aは「大正デモクラシー」が「政治のしくみをどのように変えていっ

た」のかと読み替えることができます。

「大正デモクラシー」では政党政治や普通選挙の実施による大衆の政治参加が模索されました。ここで第一次世界大戦中から大正時代の終わりまでの内閣を中心とした政治史を考えてみましょう。

第2次大隈重信内閣	・・・立憲同志会が与党
寺内正毅内閣	・・・立憲政友会が与党
原敬内閣	・・・立憲政友会(政党内閣)
高橋是清内閣	・・・立憲政友会(政党内閣)
加藤友三郎内閣	・・・(非政党内閣)
第2次山本権兵衛内閣	・・・(非政党内閣)
清浦奎吾内閣	・・・(非政党内閣)
第1次加藤高明内閣	・・・護憲三派(政党内閣)
第2次加藤高明内閣	・・・憲政会(政党内閣)
第1次若槻礼次郎内閣	・・・憲政会(政党内閣)
田中義一内閣	・・・立憲政友会(政党内閣)

以上のように内閣を並べてみると、第一次世界大戦中から大正時代にかけて藩閥内閣は後退し、政党内閣が成立していったことが分かります。例えば、第一次世界大戦末期には立憲政友会を基盤とする本格的政党内閣である原敬内閣が成立しました。その後は加藤友三郎内閣、第2次山本権兵衛内閣といった非政党内閣が続きましたが、清浦奎吾内閣に対する第二次護憲運動によって加藤高明内閣が成立すると、政党内閣の慣行が始まりました(=憲政の常道)。そして、第1次加藤高明内閣においては1925年に普通選挙法を成立させ、これにより満25歳以上の男性が衆議院議員の選挙権をもつことになり、有権者は一挙に4倍に増えました。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

強者の戦略

【解答例】

A 都市における新中間層の拡大と政治意識の高揚は、政党勢力の伸張と藩閥勢力の後退をもたらした。そのなかで「憲政の常道」といわれる政党内閣の慣行が始まり、男子普通選挙も導入された。
(87字)

続いて、設問Bです。

設問

B 上のような社会の変化は、国際的な性格をもった社会運動を生んだ。その内容と、この動きに対する当時の政権の政策について、3行以内で説明しなさい。

設問Bのテーマは、「上のような社会の変化」が生んだ、(1) 国際的な性格をもった社会運動の内容、(2) この動きに対する当時の政権の政策、です。「上のような社会の変化」については設問Aでみたところですので、早速(1)と(2)について考えていきましょう。

(1) 国際的な性格をもった社会運動の内容

設問Aでも少し触れましたが、問題文に「海外からの情報と思想の流入も、大量で急速になった」とあることから、「**国際的な性格をもった社会運動**」とは、**ロシア革命によるソヴィエトの成立などに影響を受けた社会主義運動**であることがわかります。特に、モスクワのソ連共産党の指導下につくられた国際共産党組織コミンテルンの日本支部として、**1922年には非合法で日本共産党が結成**され、私有財産制を否定し、人民による財産の共有を実現することで平等な社会をつくらうとする共産主義思想を広めていくこととなりました。

(2) この動きに対する当時の政権の政策

日本共産党の結成と、共産主義思想の国内における拡大、これに対する「当時の政権の政策」とは何か。ここは、**第1次加藤高明内閣(護憲三派)による治安維持法の制定**を想起すればよいでしょう。第1次加藤高明内閣は普通選挙実施や日ソ基本条約締結による社会主義運動の拡大・活発化を取り締まることを目的として、国体の変革や私有財産の否認を目的とする結社を禁止する治安維持法を1925年に制定しました。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

B 国際共産党組織コミンテルンの支部として日本共産党が非合法に結成されるなど社会主義運動、共産主義思想が拡大した。これに対し、当時の政権は治安維持法を制定して、取り締まりを強化した。(89字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらおうことをお勧めします。**この『強者の戦略WEBサイト』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。**

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！